宝生能楽堂　開場四十周年記念

宝生会　春の別会能　第一部

平成三十一年三月二十四日（日）
開演　十一時
開場　十時
於　宝生能楽堂

11:00

素謡　**翁**

シテ　宝生　和英

千歳　辰巳満次郎

地謡　佐野由於　前田尚廣　大坪喜美雄　小倉健太郎

11:15

高砂

ツレ　高橋　亘
シテ　後　今井　泰行　前　亀井　保雄
ワキ　宝生　欣哉
ワキツレ　野口　能弘　〃　野口　琢弘
作物出
大鼓　柿原　弘和　小鼓　観世新九郎
太鼓　金春　國直　笛　松田　弘之
後見　中村孝太郎　水上　優
地謡　今井　基　内藤　飛能　東川　尚史　和久荘太郎　朝倉　俊樹　小林与志郎　登坂　武雄　佐野　登

12:35

二人袴

山本東次郎

山本　則俊　山本　則孝　山本凜太郎

〈休憩十五分〉

13:20

安宅

シテ　武田　孝史
子方　片桐　蓮
同山　金森　秀祥　〃　渡邊　茂人　〃　澤田　宏司　〃　辰巳大二郎　〃　田崎　甫　〃　佐野　玄宜　〃　小倉伸二郎　〃　大友　順
ワキ　殿田　謙吉
延年之舞　貝立貝付
間　山本　則秀　〃　山本　則重
大鼓　亀井　広忠　小鼓　大倉源次郎
笛　藤田　次郎
後見　東川　光夫　山内　崇生
地謡　川瀬　隆士　金森　良充　高橋　憲正　水上　優　大坪喜美雄　三川　淳雄　宝生　和英　野月　聡

終演予定　十四時五十分頃

演目の解説

能「高砂」（作物出）（たかさご）

阿蘇の宮の神主は都に行く途中、高砂の浦で松の木陰を清める老夫婦に出会います。二人は神主に問われるまま、古今集の序に書かれている相生の松の謂われや、万葉集などを引いて松のめでたさを語り、実は相生の松の精であると明かします。神主は折から新船の乗り初めを勧める船頭の船に乗り、高砂の浦から住吉へ渡ると住吉明神が現れ、颯爽と舞を舞います。長寿の象徴として松のめでたさを主題に置く神能の代表曲にして、誰もが知る有名な能です。

小書「作物出」は前半、竹の青々とした垣に囲まれた、松の木が出されます。相生の松の態です。

狂言「二人袴」（ふたりばかま）

聟入りとは、結婚後初めて舅の家に挨拶に行く儀式の事をいいます。ある日、父に説得されて初めての挨拶に出掛けなる事になりましたが、大人になりきれない聟は父につい て来てくれるよう頼みます。舅の家に着いた二人は、一枚しか持参しない袴を聟に着けさせ父は外で待つことにしました。しかし、それを太郎冠者に見つかり仕方なく交互に袴を着け挨拶に臨みましたが、舅は三人で祝宴をしようと言います。しかし袴は一枚しかありません。さて…。

能「安宅」　延年之舞・貝立貝付（あたか）

安宅の湊で新関を立て、関守となった富樫は、頼朝から義経一行を止めるよう命令を受けていました。義経と弁慶一行は、山伏に変装していましたが、新関の噂を聞き義経を能力にしてしんがりを歩かせ、弁慶自らは東大寺復興の勧進の山伏と名乗り、即興で勧進帳を読んで強引に関を通過しようとします。能力の義経が見つかり、すわこれまでとなりますが、また弁慶の機転と一同の気迫で関を通過します。安堵した一同が休むところに、富樫が酒を持って現れ、先の無礼を詫びて酒宴となり、弁慶は豪快な舞を舞います。

小書「延年之舞」は常の「男舞」が、山伏の芸能である「延年」を取り入れた勇壮な「延年之舞」に替わり、「貝立貝付」は狂言の能力が扇を法螺貝に見立てて吹くのが「貝立」、シテが貝を入れる網を腰に着けるのが「貝付」です。山伏らしさが強調される小書で、内容がより分かり易くなります。

次回予告

秋の別会能　第一部

十月二十七日（日）午前十一時始

一調　**山姥**　田崎　隆三

夜討曽我　十郎　金井　雄資　五郎　朝倉　俊樹

松風　大坪喜美雄　灘返・見留

文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会